

第666回番組審議会報告

2022年3月1日開催

■出席委員

佐藤卓己委員長 佐藤友美子副委員長 今井美樹委員 鯨岡秀紀委員
太平信恵委員 津村記久子委員 細見良行委員 増山実委員

■毎日放送出席者

虫明社長、宮田専務、高山常務、磯澤取締役、藪内取締役、酒井取締役、
横田総合編成局長、奥田報道情報局長、岸本制作スポーツ局長、
村上制作スポーツ局業務推進部長、坂下制作スポーツ局エキスパート、
津田コンプライアンス局長、清水広報部長、中西番組審議会事務局長

◆議事の概要

報告事項

1. 「東野&吉田のほっとけない人」について
2. 委員の交代について

【概要】

2022年1月1日（土）14:30-16:30に放送した「東野&吉田のほっとけない人」が政治的公平性を欠くのではないかとのご意見が視聴者から多数寄せられ、1月11日の番組審議会でも、同シリーズ番組の内容について厳しいご指摘があった。弊社では専務をリーダーとする調査チームを立ち上げて、放送に至った経緯について検証し、その結果について報告した。

【各委員の主な質問や感想】

- *バラエティー番組だからという甘えのようなものがなかったか。
- *バラエティー番組なら許されるということはない。むしろバラエティー番組のほうが影響力は大きい。
- *政治的公平性に関して、番組個別ではなくて、毎日放送全体でバランスがとれていると考えているのか。
- *橋下さんは、タレントだけど維新の元政治家という、どちらとも受け止められる立場で発言を続けていると思う。「維新と関係がない」と言っても、そういう予定調和がいつまで続くのか。
- *本当に面白おかしくしゃべられるので、この3人を正月の特番に出そうとい

う企画の意図はわかる。横山ノックさんが知事になってから、大阪の首長は面白くしゃべられる人がなっているような傾向を感じる。

- *大阪の視聴者を中心に企画している印象があり、他府県の視聴者からはどう見えるかなと思った。
- *政治的に中立か偏っているか見きわめるのは本当に難しい。意識し過ぎると身動きがとれないし、萎縮するべきではない。表現の自由、報道の自由はとても大事だが、メディアも一つの権力なのでよく考えてやってほしい。
- *番組の制作者が力のあるタレント寄りなのはある程度避けられないが、強力な政治力を持った人に対して制作者がべったりになっていないか常に自覚しなければならない。
- *そもそも政治家の人をカジュアルにテレビに出すのがよくわからない。
- *「女子高生も泣かしたけどな」と口を挟んで、大笑いするシーンを見て目を疑った。あのエピソードを笑いにして、番組がそのままカットせずに使った点はセンサーがおかしくなっていると思う。
- *シリーズの中に女性のタレントが言ったら炎上するようなエピソードもあり番組全体が男性に偏っていると感じる。
- *アリバイ的にナレーションで批判めいたことを言ってそれを免罪符にして、スタジオのトークに入ったらあとは出演者任せという方法は姑息なやり方と感じる。公平性、バランスというなら、本質的な部分でやってほしい。
- *社内のほかの部門に対して意見を言えないような空気感がどこかにあるのではと思う。一つのをみんなで作っていく責任感が少し欠如しているのではないかと不安に思った。
- *個々の意見も臆さずに自由に言える社内の空気をぜひ作ってほしい。毎日放送はもともとそういう会社だと思う。
- *報道番組以外に関しては、権力の監視が目的ではないので、意識の持ち方とか判断に当たって、その部門の一番優先する目標と相反する部分がどうしても出る。対策については評価するが本当に機能するかどうかは簡単ではないと思うので、今後注目していきたい。

【会社側の説明、質問への回答】

- *現場にバラエティー番組に関する甘えがあったのではないかと考えている。「バラエティーだから」とか「フィクションだから」と、制作上エクスキューズをつけてしまっていることは率直に認めざるを得ない。
- *バラエティーだからこそ、事実確認を怠らず、意識を高めてバランスをとって、表面的な、アリバイ的なバランスではなく、本質的なバランスをとれるように複数の目でチェックしていくことが大事である。可及的速やかに社内

で体制を作る。

- * キャスティングに関しては、維新だからということではなく、今までの放送実績で視聴率が高かったという経験上、どういう番組をすればより多くの人に見ていただけるかという目線で出演依頼をしている。新型コロナウイルスの感染拡大で知事・市長の出演が非常に多くなっているということはあるが毎日放送全体として維新に偏っているとは思っていない。ただそれがどれぐらい影響力を持つかということに関しては、今後の対策に含んでいかなければいけないと思っている。
- * 政治家の方や政治的に強い存在感のある方を、バラエティ番組でお笑い芸人や一般タレントの方と同じような距離感で接していくことに制作者自身が麻痺してしまっているところは、率直にあると思う。そこから私たちは何を改善するかということ、真剣に検討している。
- * 「女子高生も泣かした」というエピソードについての指摘は、重く受けとめている。発言を強調するような編集をしていたが、この発言が何を指しているのか改めて事実確認しようとした形跡が認められず、制作のシステムが誠実に機能していなかった。
- * 公平性が表面的なアリバイとして処理されていくのではないかという懸念については一番重要な問題だと思っている。
- * 楽しくしゃべってもらえばそれで面白い番組ができるという認識があるとする一番の根本的な問題であり、聞きたいことや聞くべきことを聞き出すという覚悟を持ってやっていかなければならない。
- * 会社の風通しについては組織や制度だけで済まないところがあるが、全力を挙げて自由にものが言えるよう取り組みたい。

以 上